祭りが支える まちづくり

新型コロナウイルス感染症の流行から2年、まちは少しずつ、以前の活気を取り戻しつつある。中止を余儀なくされたイベントも再開に向け動き始めた。みどり市役所観光課の須永昌記さんと髙瀬孔明さんに、8月以降に開催を予定しているイベントや再開への思いを聞いた。

みどり市産業観光部観光課観光係

髙瀬 孔明さん

須永 昌記さん

地域の伝統を受け継ぎ活気と愛着を生む祭り

2020年の春以降、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）によりイベントの開催はもとより、外出の自粛や社会活動が規制されてきた。須永昌記さんは、「まちの活気だけでなく、観光資源として市外、県外から人を呼ぶ機会も失われてしまいました」と、話す。

そんな中、この8月に祭りが再び開催される運びとなった。

地元の祭りは、人々の楽しみやまちなかに活気をもたらす。子どもから大人まで晴れがましい舞台に立つなど、さまざまな楽しみがある。

それ以外にも地域の人々に大きな効果をもたらしていると、須永さん。「一つは、地元の伝統や歴史的行事の継承です」と、話す。例えば大間々祇園まつりは400年近い歴史を持つ。市民の健康や繁栄を願う神事でもあり、失うのは惜しい市の財産だ。

「2年前までは7月ともなれば、町の公民館などで、祇園まつりのお囃子の練習が聞こえてきました」と、話すのは髙瀬孔明（よしあき）さん。大間々町一丁目から七丁目まで、それぞれが山車を持ち、当日は本町通りを巡行する。各山車には固有の紋もある。

お囃子は主にまちの子どもたちが受け持つ。年長者から演奏を習えば世代間を超えた交流が生まれ、同じ紋を身につければ仲間との連帯感も強まる。日常の生活に戻っても、顔を合わせれば声を掛け合ったり目配りしたりと、自然発生的なコミュニケーションを育んできた。

草木湖まつりも、古里を離れた人々が年に一度帰り、顔を合わせられるようにと始まった。祭りは、人と人、人と土地とがつながるための架け橋なのだ。

また、例年は夏に行われていた笠懸まつりを秋に、さらに9月下旬からひまわりの花畑まつり、10月下旬からながめ公園で関東菊花大会を開催する予定だ。体調に配慮しつつ、久しぶりの屋外イベントを大いに楽しもう。

■まつりの問い合わせはいずれも
みどり市観光課　TEL.0277-76-1270

祭りの情報はここから みどり市観光課

8月31日までフォトコンテストも実施中

秋のイベントも再開予定

関東菊花大会

市内各所に会場を設けていた関東菊花大会が、ながめ余興場へ帰ってくる

ひまわりの花畑まつり

秋に咲かせる畑一面のひまわりを楽しもう
主催／上鹿田むらづくり推進協議会・みどり市

写真は令和元年開催時のもの

写真は令和元年開催時のもの

笠懸まつり

2年ぶり、今まで8月に実施していたものを時期を11月にイベント内容も変更して開催予定

草木湖まつり

花火とランタンで満たされる夏の一夜

1977（昭和52）年、草木ダムの竣工を機に始まった草木湖まつり。ダムの完成に伴ってこの地を離れた人などに、「年に一度は古里に戻って時間を過ごしてほしい」という願いを込めて始まった。

42回も続いていたが、2020年、21年は中止に。コロナに対する見えない不安がある中、来場者の安全を最優先に考慮し、実行委員会の約30人の委員たちが中止と判断した。

コロナの規制が緩やかになっているのを受け、今年はまつりの再開を決定。実行委員会で会議を重ね、感染症対策を念頭に置き、恒例だったステージショーやマスのつかみ取り等の日中のイベントは行わない。

しかし、祭りの華やかさや心が弾むような高揚感は大切にしたいと、花火の数をこれまでの1000発から1500発に増やす。さらに他団体の協力を得て、空中にランタンを浮かべてライトアップする、スカイランタンも予定している。

厳しい情勢は、まつりに新しいアイデアを取り入れるきっかけともなった。

「大きな空に世界平和、家族の健康、大切な人への思いを祈願し、ウクライナカラーの青と黄色のランタンを飛ばします。パワーアップした草木湖の花火と、夜空に浮かぶ幻想的なスカイランタンにご期待ください」と、須永さん。

うつむいてしまいがちだった昨今だが顔を上げ、夏の夜を存分に楽しもう。

※スカイランタンイベントの参加には事前申し込みが必要。

スカイランタンイベント申し込み・問い合わせ
TEL.080-3201-5179（Rejoice）

■開催概要

草木湖まつり

開催日時／令和4年8月15日（月）
開催場所／みどり市東運動公園（みどり市東町座間399）
開催時間／スカイランタン19:00～19:30（予定）
花火19:45～20:30（予定）

※新型コロナウイルス感染防止対策のため、飲食の出店等を野球場内に限定します。来場者は入口での検温・消毒をお願いします。
※新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況によっては、令和4年10月9日（日）に延期となります。

大間々祇園まつり

疫病退散を祈念し神輿がまちなかを渡る

地元で393年間もの歴史を持つ大間々祇園まつり。京都八坂神社の分霊をまちの中心（現みどり市3丁目）に祠を建てて祀り、まちの六斎市の発展を祈って始まった。1632（寛永9）年、神輿渡御の行列に母衣（ほろ）を着た者と、着飾った子どもたちが後に続き、まちなかを練り歩くようになる。母衣とは武士が身につける甲冑の補助武具で、長い絹布を風で膨らませて矢や石などから身を守るものだ。

その後、まちの産業として糸絹の市が盛んになると、人々は街割の組ごとに趣向を凝らし、神輿渡御に参加するようになっていった。生活用品をまかなう市から戦国の世を経てまちの産業へ。大間々祇園まつりは市神として、いずれの時代も人々の生活とともにあった。

祇園まつりはまた、疫病退散の祈りでもある。平安時代に日本全国で天然痘が流行った際に、それを鎮めるため神に祈ったのが京都での始まりだ。コロナ禍でこの2年間は、まちなかの渡御は行っていなかったが、神事は続けてきた。

「今年は、コロナおよび熱中症に配慮してパレード等は中止しますが、規模を縮小した上で祇園まつりを開催します。伝統の重み、地元の方々の熱意をぜひ感じ取っていただきたいです」と、高瀬さんは熱を込めて語った。

2年振りに行われる神輿の渡御。夏まつりの風情を味わいながら、ともに疫病退散を祈ろう。

■開催概要

大間々祇園まつり

開催日時／令和4年8月1日（月）～3日（水）
開催場所／みどり市大間々町本町通り
開催時間／1日　15:00～22:00
2日　13:00～22:00
3日　15:00～21:00

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況によっては、内容の変更または祭り中止となる場合があります。

文／小林美佐子　写真／編集室　写真提供／みどり市　デザイン／伊藤剛志